

# 日本語のプロセス・ライティングにおける効果的なフィードバック —奨学金応募エッセイの作成を通じて—

稲葉 みどり

日本語教育講座

## Exploring Effective Feedback in Process-oriented Japanese-language Essay Writing

Midori INABA

*Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

### 要 約

本稿では、プロセス・ライティングの手法を取り入れて行った日本語科目（留学生対象）の授業方法や指導手順を紹介し、外国語教育における効果的なライティング指導の方法を考察した。「留学の目的及び将来への抱負」をテーマとする奨学金応募のエッセイの作成を取り上げ、初稿から最終稿に至るまでの指導、及び、改稿の過程を分析した結果、「修正したほうがよい理由をはっきり説明する」、「内容に関する簡単な問いかけをする」、「修正方法を具体的例とともに示す」等が指導生のライティング活動を活性化し、内容構成力を向上させる上で効果的なフィードバックの方法であることがわかった。また、指導生は授業を通じて何度も書き直すことの重要性や内容を深める方法を学んだことも明らかになった。

**Keywords** : 外国語教育、日本語教育、プロセス・ライティング、フィードバック

### 1. はじめに

日本語科目は、共通科目の中で学部留学生を対象に外国語としての日本語を教える授業である。本稿では、日本語科目において行ったプロセス・ライティング（process writing）を取り入れた授業の方法や指導の手順等を紹介し、フィードバックの効果や授業を通じて学習者が学んだことを分析する。

プロセス・ライティングとは、作品（product）を完成するまでの様々な過程（process）を重視するライティングの指導方法で、その過程に教師<sup>1</sup>からのフィードバック（feedback）を導入することにより、下書きを修正しながら最終的な作品を完成させることである。ここでは、「留学の目的及び将来への抱負」をテーマとする奨学金応募エッセイを取り上げ、どのようにしたら説得力のある良い文章を書くことができるかを具体的なフィードバックの内容を通して考察する。

### 2. 先行研究

#### 2. 1 プロセス・ライティングの手順

ライティングには、いくつかのプロセスがある。例えば、書き始める前に構想を練る作業（brainstorming）、構想をまとめ構成を考える作業（structuring）、下書きをする作業（drafting）、下書きを他者に読んでもらいコメントを得る作業（getting feedback）、下書きを修正して作品（product）を完成させる作業（editing）等である。学習者はこのようなプロセスを繰り返しながら、作品を仕上げていく。これらのプロセスを繰り返すことにより、自己中心に書かれた文章から、読み手の存在を意識した内容に書き直されていく（Furneaux, 1998）。

本稿では、これらの作業を奨学金の応募エッセイを完成させていくための6つのステップ（後述）の中に組み込んで再構築して用いる。

## 2. 2 プロセス・ライティングの有効性

プロセス・ライティングによる指導がライティング活動にどのような効果や影響を与えるかについては、先行研究でその有効性が報告されている。望月(2006)は、英語専攻の大学生を対象としてプロセス・ライティング指導を行い、談話レベルの作文において一貫性、正確さ、流暢さが向上したという結果を提示している。また、この活動を通じて、学習者は作文の構成、一貫性、目的、内容の適切さ、語彙の選択等に注意を払うようになったことをアンケート調査で確認している。

Cowie (1996) は、書き直しが学習者のライティング力を向上させる重要な戦略 (strategy) であると述べている。Taniguchi (1990) は、プロセス・ライティングは、学習者の誤りに対する警戒心を取り除くので、ライティング力の育成に有効であると述べている。Sommers (1982) は、教師によるフィードバックの時期や方法に関しては、読み手にきちんと理解されているか確認するために、作品を仕上げている途中で行うことが望ましいとしている。本稿では、これらの点を踏まえて行った授業を分析して考察を進める。

## 3. 授業の方法

### 3. 1 指導生とエッセイのテーマ

指導生<sup>2</sup>は、中国を母語とする学部2年生で、日本語力は日本語能力試験の1級程度である。作成するのは民間企業の奨学金に応募にする1600～1800字程度のエッセイで、「留学の目的及び将来への抱負」というタイトルの下に、1) 留学の目的は何か、2) 将来、留学の成果をどのように生かしたいか、3) 留学先での勉強は如何にあるべきかという3つの質問がついている。

### 3. 2 6つのステップ

奨学金の応募エッセイは、高い競争率の中で資金を獲得できるようにならなければならない。限られた文字数を有効に使い、自分の考えを明確に述べ、経験や体験を盛り込み、具体的に説得力がなければならない。これに自分らしさがアピールできれば、生き生きとした印象に残る作品になる。これを目標として、6つのステップを設定して指導を行った。

#### ステップ1：問題点を洗い出す

テーマや質問と合致しているか、必要情報は入っているか、字数は規定に合っているか等を検討する。

#### ステップ2：テーマに合わせて構成する

問題点を整理し、全体をテーマや質問に沿うように構成しなおす。

#### ステップ3：内容を深める

具体例や情報を補い詳しく述べる。読み手にわかりやすく説明しているかどうか検討する。

#### ステップ4：説得力を高める

全体の内容の整合性、内容や主張の一貫性を確認し、経験に基づく記述を加えることで説得力を高める。

#### ステップ5：独創性を出す

自分にしかできないことを盛り込み読み手を動かす。体験に基づいた記述で実現可能性や信憑性を上げる。

#### ステップ6：体裁を整える

句読点や表記などが適切かどうか点検する。要点がわかりやすくする工夫をして体裁を整える。

## 3. 3 フィードバックの方法

フィードバックは、主に教師と学習者のカンファレンス (teacher-student conference) 形式で行う。カンファレンスとは Taniguchi (1990) の提案するもので、教師と学習者が話し合いながらフィードバックを行うことである。内容の向上を目的とした内容カンファレンス (content conferences) と修正を目的とした修正カンファレンス (editing conferences) に分けられる。前者は自分の言いたいことを表現するのを助ける目的で、後者は後の段階で原稿を推敲し良いものにする目的で行う。

ステップ1～5では、内容カンファレンスを中心にして、内容を向上させるためのフィードバックを行い、ステップ6では、修正カンファレンスを通して、日本語表現や体裁を整えるためのフィードバックを中心に行う。

## 4. 奨学金のエッセイ・ライティング指導

### 4. 1 ステップ1：問題点を洗い出す

エッセイの内容が規定に合っているか、テーマや質問にふさわしいか等を検討した。初稿 (文末資料1参照) は、全体が3つの段落に分けられている。文章の長さ (分量) は、第1段落が約220字、第2段落が約800字、第3段落が約120字、全体で約1200字である。課題の1600～1800字より幾分少ない目ではあるが、今後の加筆を考慮すれば、ほぼ妥当である。

次にエッセイの内容をみる。概略を段落別にまとめると、以下のような内容になる。

#### 第1段落 (約220字)

- ①自分の夢 (留学すること)
- ②留学の背景 (高校で芸術の勉強をする)
- ③日本にきた経緯 (広告デザインの勉強)
- ④日本での生活の大変さ (精神的な病にかかる)
- ⑤心理学を学ぶ動機 (自分の心理分析)

#### 第2段落（約800字）

- ⑥現在の所属（臨床福祉心理）
- ⑦取りたい資格（社会福祉士）
- ⑧将来目標（日本でソーシャルワーカーとして働く）
- ⑨社会福祉に関する仕事の意義（社会貢献）
- ⑩中国の福祉の状況（福祉資金獲得のテレビ番組）
- ⑪中国での福祉の必要性（中国の福祉制度の遅れ）

#### 第3段落（約120字）

- ⑫現在の勉学の状況（社会福祉と心理学）
- ⑬将来計画（大学院進学・臨床心理士の資格取得）

第1段落には、留学に至る経緯や留学生活の苦勞、心理学を学ぶきっかけ等が書かれている。質問1～3に項目を分けて書いていないので、指導生本人に確認したところ、第1段落を留学目的（質問1）のつもりで書いたとのことであった。しかし、書かれた内容は、留学の経緯で、質問1の回答となっていない。

第2段落では、前半で現在の所属、取りたい資格、将来目標などを述べ、後半で社会福祉に関する仕事の意義、中国の福祉の状況、中国での福祉の必要性などが述べられている。しかし、留学の成果を将来どのように生かしたいかには触れていない。中国のテレビ番組のことに段落の約3分の2の字数を使っている。

第3段落では、勉学の状況を書いているが、留学先での勉学のあり方（質問3）としては、内容が薄い。

以上、内容の検討から、留学の目的（質問1）、成果をどう生かすか（質問2）、勉学のあり方（質問3）に関して的確に答えていないことが判明した。

#### 4.2 ステップ2：テーマに合わせて構成する

初稿の検討（ステップ1）で明らかになった問題点を修正するためのフィードバックを行う。書き換えのポイントがわかりやすいように、修正案を提示しながら、以下のような指摘をした。

留学の目的、成果の生かし方と将来の計画、留学先での勉学のあり方という見出しをつけて、それぞれに合った内容に書き直す。初稿で取り上げた項目を質問の内容に沿って整理し直し、足りない部分は補う。

留学の目的は、社会福祉士の資格取得や福祉や心理の分野を学ぶ意義などを膨らめて明確に述べる。

留学の成果の生かし方は、卒業後ソーシャルワーカーとして日本で働いて経験を積み、その後中国で知識を生かしたいと述べているが、具体的な成果が何で、それをどのように生かすかを詳しく述べる。

留学先での勉学のあり方については、臨床福祉心理コースに所属しているが、さらに心理学の講義も受けていることを述べているだけである。ここはこのエッセイの重要な部分なので、現在自分がどのように勉学に取り組んでいるかを経験、体験などの事実に基づいて示す。

質問3に関する記述は、短くやや情報部不足である。福祉に関する講義を受けながら、心理学関連の講義もできるかぎり受けていると書かれているが、なぜ今心理学も学ぶのかを説明しなければ、意図が明確に伝わらない。将来、大学院に進学し、臨床心理士の資格を取得して、高度な知識を身につける意向を示したいのであろうが、文面からそれが伝わる工夫が必要である。また、なぜ夜間大学院に通うのかも説明不足である。昼間はソーシャルワーカーとして働くので、大学院へは夜間で通う旨がわかるように書く。このエッセイを読むのは一般の人（会社員）と想定される。学部卒業後には社会福祉士、大学院修士課程修了後には、臨床心理士の資格試験が受験できるという情報が読み手に伝わるように工夫する。

#### 4.3 ステップ3：内容を深める

第2稿が留意点を踏まえて書き直されているかどうかを検討する。特に必要な情報を加え、全体がテーマに沿って構成されているかどうかを見る。

見出し毎の文字数は、留学の目的が約540字、留学の成果の生かし方が約480字、勉学のあり方が約720字、合計約1640字で、全体の長さ及び文字の配分は適当である。留学の目的は、4つの段落で書かれ、以下のような内容で一応妥当である。

- ①就きたい職業（ソーシャルワーカー）
- ②とりたい二つの資格（社会福祉士と臨床心理士）と現在の専門（臨床福祉心理）との関わり
- ③将来の計画（学部卒業後大学院へ進学希望）
- ④将来の仕事の計画（日本で働きその後中国で働く）
- ⑤二つの資格をとる理由と意義

留学の成果をどのように生かすかは、整理され、以下の内容で構成されている。

- ⑥専門の仕事に就く（日本で福祉関係の仕事に就く）
- ⑦日本で仕事に就く理由（実地経験を積む）
- ⑧中国社会へ貢献する（社会保障の整備）
- ⑨中国の福祉制度の現状（制度の整備が必要）
- ⑩日本で学ぶ理由（日本は福祉先進国）

ここでは、指導生の考えが初稿より整理されている。卒業後、日本で働くのは実地経験を積むためと説明している。中国社会の現状を踏まえ、この職業が将来中国に貢献できるものであることを述べている。日本と中国では社会環境が異なるにも関わらず、日本で学んだことを中国で生かせるかという問いにも、制度の利用者への思いやりの気持ちは世界共通であると答えている。

留学先での勉学のあり方は、以下の内容で構成され

ている。

- ⑪大学で学んでいること（福祉関係の授業を履修）
- ⑫それに加えて心理学の授業も履修
- ⑬心理学や社会学の本を自主的に読んで勉強
- ⑭ボランティア活動（知的障害者の作業所）
- ⑮夜間大学院に進学する（働きながら通う）
- ⑯臨床心理士の資格をとる
- ⑰日本にいる留学生の心理カウンセラーもしたい
- ⑱大学4年間はこれらのステップとなる重要な時期

前半は大学での専門分野に関する学習について述べ、ボランティア活動が加えられた。後半は大学院進学、臨床心理士の資格取得、留学生の心理カウンセラーをしたいという希望が書かれ、勉学のあり方とは多少離れるが、一応テーマに沿ったものになったと言える。そこで、これらの項目を精査し、さらに内容を深めるよう助言した。

#### 4. 4 ステップ4：説得力を高める

このエッセイを説得力のあるものにする方法を考察する。第2稿では、初稿の内容が整理され、各質問に合うように内容が配列し直され、必要に応じて加筆され、一応内容が整ったと考えられる。しかし、この文章からは、指導生の力強い姿がまだ見えてこない。内容に重みも感じられない。また、奨学金が獲得できるような強い印象を与える文章にも至っていない。

このエッセイをさらに充実したものにするには、1) 取り上げている内容の整合性を高める、2) 述べている事柄と自分との接点を明らかにする、3) 自分の考えや必要な情報を盛り込む、4) 経験や事実に基づく記述や具体例を挙げて説明する等が考えられる。フィードバックの内容と指導生の改稿内容を以下に紹介する。

留学の目的では、将来の職業（社会福祉士）と現在の専門分野（臨床福祉心理）との関係を明確にする。大学院に進学して臨床心理士の資格を得ることで、どのような可能性が広がるのか具体的に示す。将来は中国の社会福祉にどのように貢献できるかを具体的に述べる。これを受け、指導生は以下の内容を盛り込んで改稿<sup>3</sup>した。

- ①臨床心理士の資格をとることにより、福祉だけでなく、心の病を抱えている人のサポートも可能になる。これは、後に述べる日本にいる留学生の心のケアをするカウンセラーになることにつながる。
- ②帰国後、中国で社会福祉に関する制度を作る仕事等に携わりたいと考えている。

次に留学の成果の生かし方については、中国の社会背景や将来計画も含めて、もう少し詳しく述べる。フィードバックを基に、指導生は留学の成果を以下の3点に絞って記述した。

- ③日本で福祉関係の職に就けば、日本で学んだ理論を実地経験を通して確実なものにすることができる。
- ④帰国後は臨床福祉心理の分野の仕事に携わる。中国では介護や福祉に関する専門知識をもつ人材の確保や制度作りは急務で、これらの場で活躍したい。
- ⑤近年精神的病に苦しむ中国人は増加しているので、留学生も含めカウンセリングをしたい。

最後に留学先で勉学のあり方は、現在自分が努力していることを裏付ける大切な項目である。福祉の体験、ボランティア活動、カウンセリング活動等、実際に行っていることを述べる。以下は、フィードバック後に指導生が組み込んだ内容である。

- ⑥社会福祉士の資格取得のために努力していること
- ⑦資格取得が最終的な目標ではなく、質の高い社会保障を提供できるよう資質向上に努めていること
- ⑧実践や体験を重視し、ボランティアをしていること
- ⑨福祉や心理に関する知識を利用して、留学生のための心のケアをできるように努力していること

#### 4. 5 ステップ5：独創性を出す

学習者が自分らしさを盛り込むことによって、独創性を出す方法を考えることにする。具体的には、指導生自身でなければできないことや本当に実践している人でなければ書けないことを挿入し、真剣な取り組みが読み手に伝わるように工夫する。

指導生に、「看護や福祉の場で貢献できる裏付けはあるか」、「日本で活躍の場は具体的にどのようなところか」、「中国人が日本人よりできることは何か」、「中国人だからこそ日本に対してできることは何か」等の質問を投げかけて、じっくり考えさせた。

さらに、内容が自分の経験や努力に基づいており、信憑性があること、将来の計画は現状から判断して実現可能であることを示す必要がある。例えば、大学卒業後は一旦日本で職に就きたいとしているが、本当にその可能性はあるのか。日本人でも就職先を見つけるのが難しい日本において、本当に職を得ることができるのか。自分の資格、資質、能力等を鑑みて、日本人を超えて職を得られる見通しを述べるように助言した。すると、指導生は以下のような点を加えた。

- ①ボランティアで知的障害者の作業所に出かけた時、言葉や国籍の壁を乗り越えて、利用者の手伝いをできたこと
- ②この背景には作業所のスタッフの温かい心遣いがあり、日本人ではない自分でも福祉の分野で働くことができる自信をもったこと

また、中国人が日本人にカウンセリングできるのかという疑問に対して、指導生は次のような経験を挿入した。

- ③日本人の親（知人）の依頼で、引きこもりで不登校の中学生に接した時、心を開いてもらえたこと
- ④中国人なので日本の一般的な価値観で子どもを評価しないので、この中学生が安心して話してくれたのだと確信したこと
- ⑤これらの経験から、必ずしも日本人でなくても福祉やカウンセリングの分野の仕事はできること
- ⑥外国人だからこそうまくいく場合もあること

また、留学生のカウンセラーになるという点については、以下の点を裏付けとして加えた。

- ⑦留学中には心の病にかかることもあり、指導生自身も心の病にかかった経験をもつこと
- ⑧留学生部門にも専門知識や留学経験、母語のわかるカウンセラーの必要性は十分あり、将来カウンセリング活動は可能であること

最後に、指導生は体験に基づき、国際交流の推進に関しても言及した。

- ⑨福祉の分野の仕事は、知識や資格だけでなく、思いやりの気持ちが大切であること
- ⑩実習やボランティア体験等を通じて、中国人でも日本の福祉に参加できうれしく思うと同時に、国や制度は異なっても福祉に国境はないと実感し、日本と中国の福祉事業のかけ橋になれると思ったこと

以上、教師との内容カンファレンスを通じて、自分らしさを盛り込むことができ、エッセイが生きたものになったと考えられる。

#### 4. 6 ステップ6：体裁を整える

総仕上げは、Taniguchi (1990) 提案する修正カンファレンスを通じて行う。この段階では言語形式や文章全体の体裁を整えるのを目的として、以下のようなフィードバックを行った。

- ①見出しの下に小見出しをつけて、読みやすくする。小見出しだけで、主張のポイントが読み手に伝わるようなタイトルをつける。
- ②キーワードや重要な箇所は太字とし、下線を引く。
- ③日本語を整える。語句が的確で漢字等が正しくつかわれているかを確認する。

以下は、最終稿（final draft）の見出しと小見出しである。第2稿より発展させて、エッセイの内容に合わせて変更した。課題の質問文のままではなく、質問を念頭において敢えて少し言葉を変えた。また、小見出しは、文章の内容を代表するタイトルにして、読み手にポイントを訴える効果を狙った。

- ①留学の目的
- ②成果の活用と将来の計画
  - (1) 日本の福祉関係の現場で研鑽を積む
  - (2) 中国で臨床福祉心理分野の仕事に携わる
- ③目的達成の方法と今後の課題
  - (1) 社会福祉士の資格の取得
  - (2) 実践や体験を通じた学習を重視
  - (3) 留学生のためのカウンセリング活動
  - (4) 福祉を通じた国際交流の推進

日本語の修正は、この段階で集中的に行った。この指導生の日本語能力は高く、この種のエッセイを書ける能力は十分もっていたので、これ以前は、特に誤解を生じるような部分を除いて、敢えて字句等の細かい修正は避けてきた。内容向上のためのフィードバックに重点をもってきたからである。最終稿は文末の資料3に添付した。

## 5. フィードバックの効果

このプロセス・ライティング指導を通じて明らかになったことは、フィードバックが作品を完成させていくうえで非常に重要な役割を果たすということである。

特に内容カンファレンスは、教師が問題点を発見したとき、学習者の意図を確認してからフィードバックすることを可能にするので、より適切なコメントができる。学習者にとっても、修正点について、なぜ修正が必要か、どのように修正すればよいかをリアルタイムで確認しながら修正できる。

フィードバックの中で特に効果的だと思われたのは、「修正理由を説明すること」、「簡単な問いかけをすること」、「修正の方法を具体的に示すこと」である。

修正箇所を指摘する場合、修正の必要な理由をはっきり説明すると、指導生は修正のポイントを明確に把握でき、修正案を考えるのが容易になる。

簡単な問いかけ、例えば、「なぜそう思うのか」「具体的な例をあげよ」「関連した経験や体験はあるか」「これはどういう意味か」「何を言いたいのか」「もっと詳しく説明せよ」などは、述べていることの根拠や因果関係を明確にしたり、具体例や経験を挿入することで説得力を上げたり、読み手を意識してわかりやすく書き直す場合等に役立つ。考えを整理していくきっかけにもなる。

初級の学習者を対象とした Gascoigne (2004) の研究では、内容に関する簡単な質問を用いたフィードバックが修正に効果的であることを示しているが、ここでは、上級者の場合にも有効であることがわかった。

修正方法について例(例文)を挙げて具体的に示すことは、言語モデルとしても、新しい着想を促す上でも、学習者にとって重要である。この点について、指導生は「言いたくてもどのように表現したらよいかわからない場合や自分の用いた表現が本当に正しく自分の言いたいことを伝えていなかった場合、修正例の中に自分の考えに近いものがあれば、それを利用することができる。また、提示された例(例文)が指導生の考えに当てはまっても、当てはまらなくても、それがヒントになって、新たな着想を可能にする」と述べている。

フィードバックは具体的な方が学習者の修正が効果的に行われるとする Ferris (1997) の主張や、フィードバックの内容は学習者が修正を行う際に役立つものが望ましいとする岡田(2006)の提案とも共通する。また、フィードバックが明確ならば、学習者はそれを参考にして、適切なものを見つけようとするので、ライティング活動や言語学習活動が活発になるとする Makino (1993) の主張にも通じる。

## 6. 指導生の感想から見た指導の効果

今回のプロセス・ライティング指導が学習者のライティング活動にどのような効果や役割を果たしたかを考察する。授業終了後に指導生は、以下のようなことを学んだと述べた。

- ①文章を書き始める前に与えられたテーマと質問の意味をしっかりと理解することが大切である。何を聞かれているのか、どう答えたらいいのかをしっかりと考えずに書き始めてしまった。初稿の内容を検討したときに、内容が質問とずれているのを指摘され、初めてこのことに気がついた。いくらたくさん良いことを書いても、質問と合わなければどうしようもない。質問に適切に答えることが必要である。
- ②読み手がどんな人なのかを意識してわかりやすく書くことが大切である。また、読んでくれる人の

気持ちも大切にしたい。

- ③よい文章を書くには、文章をたくさん読むだけでなく、多くの人に読んでもらい質問や意見をもらうことが役に立つ。
- ④時間をかけて内容を検討しながら書き、何度も書き直すことが必要である。
- ⑤目標実現のための自分の取り組みが読み手にうまく伝わるように、経験や現在の状況などを上手に織り込む工夫をする。

以上から、指導生は今回のプロセス・ライティングを通じて、文章を書く際の基本的なことを身につけると考えられる。①からは、書き始める前には書く内容や目的を明確にし、ブレンストーミングにより構想をしっかりと練ること、②からは、読み手を意識して説明を加え、適切な語句を選択して書くこと、③からは、フィードバックを受けることの重要性、④からは、何度も書き直すことの必要性、⑤からは自分の体験や経験を盛り込むことで、説得力や独創性が高められることを学んだことが示唆され、内容構成力の向上という観点からは効果が認められたと考えている。これらの結果は、ライティング力を向上させるには修正して書き直すことが重要であるとする Fatham and Whalley (1990) の主張や、日本人の大学生の英語教育を扱った岡田(2006)、望月(2008)の研究で検証されたプロセス・ライティングの有効性とも一致する。

## 7. ま と め

奨学金応募エッセイの添削は、よく留学生から依頼を受ける。日本語の表現や字句は容易に修正できるが、内容は簡単には良くならない。本稿での分析や考察から、内容を充実させるには、教師の一方的な添削ではなく、学習者とのやり取りを通じて、言いたいことを確認したり、一緒に構想を練ったりしながら、修正や改稿を繰り返す作業、すなわち、プロセス・ライティングが有効であることが明らかになった。また、実際に応募する奨学金のエッセイを仕上げるというような学習者にとってオーセンティック (authentic) な活動を取り入れることが学習意欲を高め、指導効果を高くすることも明らかになった。ライティング指導に関しては、稲葉(2001, 2002, 2003a, 2003b)でも別の角度から研究を進めてきたが、これらの研究に加え、今回のプロセス・ライティング指導で提示した方法や得られた知見が日本語教育におけるライティング指導の一助となれば幸いである。

## 謝 辞

本稿をまとめるにあたっては、自分のプロセス・ラ

イティングの過程や指導の内容、及び、作品を分析し掲載することを快く承諾して下さった指導生の方に心より感謝いたします。また、査読者の方々からは、数々の有益なコメントや助言をいただきました。筆者の力不足からそれらを十分に生かすことはできませんでしたが、この場を借りてお礼申し上げます。

## 参 考 文 献

- 稲葉みどり (2001). 「日本語のアカデミック・ライティングの指導」『教養と教育』1, 145-154.
- 稲葉みどり (2002). 「日本語作文の誤文分析—読み手の理解を妨げる要因—」『教養と教育』2, 27-38.
- 稲葉みどり (2003a). 「ライティングにおける語用論的誤りの回避」『教育実践総合センター紀要』6, 23-30.
- 稲葉みどり (2003b). 「意味論的誤りと自己校訂能力の養成」『教養と教育』3, 11-22.
- 岡田靖子 (2006). 「大学授業におけるプロセス・ライティングの取り組み—アンケート調査と内省文の分析を踏まえて」『聖学院大学論叢』18 (3), 249-263.
- 望月昭彦 (2008). 「プロセスライティングの有効性—大学生の場合」『帝京大学文学部教育学科紀要』33, 37-47.
- Cowie, N. (1995). Students of process writing need appropriate and timely feedback on their work, and in addition, training in dealing with that feedback. *Saitama University Review* 31 (1), 181-194.
- Fatham, A., & Whalley, E. (1990). Teacher response to student writing : Focus on form versus content. In B. Kroll, *Second language writing : Insights for the classroom* (178-190). Cambridge : Cambridge University Press.
- Ferris, D. (1997). The influence of teacher commentary on student revision. *TESOL Quarterly* 31, 315-335.
- Furneaux, C. (1998). *Encyclopedic Dictionary of applied Linguistics*. Oxford: Blackwell.
- Gascoigne, C. (2004). Examining the effect of feedback in beginning L2 composition. *Foreign Language Annals* 37 (1), 71-76.
- Makino, T. (1993). Learner self-correction in EFL written compositions. *ELT journal* 47 (4), 337-341.
- Sommers, N. (1982). Responding on student writing. *College Composition and Communication* 33 (2), 148-156.
- Taniguchi, J. M. (1990). Who does what with errors? *Cross Currents* 40 (3), 171-176.

## 資料1 初稿

私は子どもの頃からいつか外国で留学しようという思いがずっとありました。そして高校で芸術の勉強をしていて、日本で広告デザインを学ぶきっかけで日本に留学してきました。しかし、異国の留学生活は単に楽ではなかったです。言葉の支障やバイトでつぶやかれた放課生活の中、気分障害の病気にかかってしまいました。それはまた大変で大変な時期でした。そして自分の気持ちを知りたくて、よくするために心理学に興味を持って、愛知教育大学で臨床福祉心理を勉強しています。

今の私は愛知教育大学の臨床福祉心理コースで勉強しています。大学の4年間で修得した知識で、社会福祉士の資格をとります。そして日本でソーシャルワーカーとして福祉関係の仕事に着いて、日本の福祉事業を見て、知って、身につけたいと思います。これは、長い幾月をかかるとやりがいのある事だと信じています。いつか私は中国に帰って、日本で積んだ知識を経験が役に立つと思います。繰り返してみれば、中国の障がい者を見かけたりした事がほぼなかったです。13億人いる中国が障がい者数は少ないはずがないと思います。しかし、あまり見かける機会少ない事は日本の昔のように家族によって隠されたり、病院でとじ込まれたり可能性が高いと思います。今年度の帰国をきっかけで中国のテレビ番組が慈善事業のことが流されているのを見ました。その内容は、いくつかのテーマがあって、テーマの提出者達が自分のテーマをアピールするチャンスを平等に与えられ、これからの内容および将来性を測っている慈善家がいって、一番舌切な事業を選び、選ばれたチームが〇〇のお金を慈善家の手からもらえうという番組でした。私はとても関心を抱いているチームがありました。それは、四川大地震で障害者になった方達の再就職を訓練するたもの資金を得ようとするチームです。残念ながら、最後このチームが選ばれなかったです。理由は予選でチームが欠席でした。民間の慈善家達が行った事業だったので、他グループの配慮を含まなければ行けない事も十分分かっていました。しかし、四川大地震で手足を失った方々が民間の慈善家の援助しか手に入れない事はあまりにも悲しいことではないでしょうか。完全な国の福祉制度が要求されていますし、地震のような急な自然災害にあわたり人達の救急体政も求められています。福祉を勉強していなければ、私もただ中国の民間慈善事業発展しえると感動してしまっているかもしれません。

私は今、福祉に関する講義を受けながら、できるだけ心理学と関係のある講義も受けています。それは、臨床心理もソーシャルワークを行う時にとても役立つと思ったからです。卒業してからも、夜間大学院に通って臨床心理士の資格を取りたいと思っています。

## 資料2 第2稿

### ①留学の目的

私は、将来、社会福祉士や児童相談員などのソーシャルワーカーになりたいと思っています。また、臨床心理士の資格も取得してスクールカウンセラーとして働きたいとも考えています。そのために、現在は愛知教育大学の(現代学芸課程)臨床福祉心理コースで学ん

でいます。

学部で臨床福祉心理を4年間勉強し、先ず社会福祉士の資格をとるつもりです。そして、卒業後は日本で福祉関係の職に就きたいと思います。同時に愛知教育大学の夜間大学院（昼夜開講コース）に通い、臨床心理士の資格も得たいと思っています。

将来は中国へ帰って仕事をするつもりですが、日本で一旦この分野の職に就きたいと思います。なぜなら、中国ではまだ福祉関係の事業は一部だけですから、この分野では先駆的な日本で実践経験を積み、これらの知識と経験をもとに中国の福祉を支援していきたいと思っています。

特に現代社会では、心の病をもつ人がたくさんいます。留学先でストレスにさらされ生活や勉学に支障を来す場合もあります。これらの人々には、適切な心のケアや対応が求められています。それにより適切に対応するために臨床心理士の資格も取りたいと思います。社会福祉士として働く場合にも、臨床心理の知識や経験を持っていれば、より充実したケアができると思います。

## ②成果の生かし方と将来の計画

まず、私は日本で修得した福祉と臨床心理学の知識を日本で生かそうと思っています。なぜならば、日本の大学で日本の福祉制度と心理学知識を学び、日本の施設で実習しますので、日本の福祉現場で習った論理を結んで行くべきだと考えています。そして、現場で積んだ経験を中国の福祉事業を応援していきたいと思っています。「日本の福祉制度が中国の福祉制度と違うではないか？」と言う疑いに対して、私はこう思っています、それは制度が違っていても制度を利用する方達の気持ちは一緒です、人々への思いやりが全世界に通じていると思うからです。例えば、日本における高齢社会の問題が中国でも進んでいます、2006年現在、中国の高齢者人口は1.45億人90年代以来、平均年3.3%のスピードで増えつづけ、2020年に2億4800万人に達すると予測されています。中国の高齢者介護や老人福祉など諸問題はこれから重要となっています。それだけではなく、障害者福祉、児童福祉など高い質の社会保障が中国これから重要となっている課題と言えます。これは私は日本で福祉を学んでいる理由です、福祉の先進国である日本のいい制度を母国に伝えて行こうと思っています。

## ③留学先での勉学のあり方

今は私は社会福祉士の資格を取るために福祉に関連する講義をすべて取得しています（学年によって、限られている講義があります）。それに、できるだけ心理学の講義も取っています、講義で福祉の制度を理解するだけではなく、世界各国の福祉事業のビデオを見て、その国の背景や文化下の福祉制度を理解、分析して世界の福祉を見ることが出来、優れた制度と考え方

を知ることができます。まだ授業のない時や通学電車の中で心理学、社会学の本を読んでいます、日本語の著作ですので少し時間がかかりますが、時々一回読み終わっても、よく理解するために、二回目で読み直すため、さらに時間がかかってしまいます。できるだけたくさん本を読んで、豊富で優れた論理をたくさん知っておきたいと考えています。しかし、論理だけでは物足りないです、論理を実践と結びつけることは大切だと思われています、学生にとって、社会でのいい体験はボランティア活動です。今私は知的障害者のいる小さな作業所でボランティアをしています、臨床福祉心理コースの学生ならば、いろいろ意味の理解がもっと時間かかることになるでしょう。そして私は将来福祉の仕事しながら、夜間の大学院に通って臨床心理士の資格をとる考えがあります、現代社会でストレスにさらされる人が増えて来ましたが、特に日本に留学で来ている留学生達がカルチャショックや様々な困難で鬱状態に落ち安いです。もし私は余裕な時間にカウンセラーとして一緒に棚上げの時間を作れたら。私にとっては大学の4年間は必要な知識と私の専攻を支える知識を習う大切な時期場であり、社会に踏み出す準備する場であり、日本と中国と世界をもっと深く理解する場であり、

## 資料3 最終稿

### ①留学の目的

私は、将来、社会福祉士として児童相談員やソーシャルワーカー等の福祉関係の仕事に就きたいと考えています。そのため、現在、愛知教育大学の現代学芸課程臨床福祉心理コースで学んでいます。また、臨床心理士の資格も取得し、心の病を抱えている方々のサポートもしたいと考えています。学部卒業後は、働きながら愛知教育大学の夜間大学院に通い臨床心理の分野の勉強もする予定です。中国では、社会福祉に関する制度がまだ十分に整備されていないので、日本でこの分野を勉強し、将来は中国で社会福祉に関連した制度を作る仕事等に携わりたいと思います。

### ②成果の活用と将来の計画

#### (1) 日本の福祉関係の現場で研鑽を積む

大学卒業後は、まず日本で福祉関係の仕事をしたしたいと思います。日本の大学で構築した社会福祉心理の知識を日本の福祉の現場で生かすことにより、理論と実践を結びつけ、より確かな実力をつけたいからです。

#### (2) 中国で臨床福祉心理分野の仕事に携わる

日本で勉強や経験を十分に積んだ後、中国に帰国して福祉関係の仕事に就くつもりです。現在、中国では経済が急速に発展していますが、福祉関係の事業はまだ一部に留まっています。中国はこれから高齢社会に入っていくと同時に、一人子政策によって介護の問題



が深刻になることは間違いありません。しかし、経済発展に夢中になっている中国政府の社会福祉政策は立ち遅れています。よって、福祉に関する専門知識を持つ人材の育成や社会福祉制度の作り等は急務であり、私はこれに携わりたいと考えています。

さらに、経済発展の陰で、近年中国ではストレスによるうつ、気分障害などの心の病気を患う人が増えてきています。これらの人々へのカウンセリングや適切な対応も中国の大きな課題です。福祉や臨床心理の専門知識をもつ人材の必要性は高まっています。日本で得た知識や経験をもとに、この分野にも寄与できたらと考えています。

### ③目的達成の方法と今後の課題

#### (1) 社会福祉士の資格の取得

私は、現在、社会福祉士の資格を取るために福祉や心理に関連する講義を取って勉強しています。資格を取るのが最終目的ではありません。資格を取る課程で得た知識を利用して弱い立場にいる人たちに質の高い社会保障を提供し、支援していきたいと考えています。

#### (2) 実践や体験を通じた学習を重視

現在、私は知的障害者のいる小さな作業所でボランティアをしています。これまで得た知識を福祉の現場で活用することにより実践できる力を養うためです。留学生である自分でもできるだろうか、言葉は通じるだろうかなど、はじめはとても不安でした。でも、作業所のスタッフの方々に暖かく接していただいて、緊張しながらも利用者の方々の手伝いをすることができました。

また、親からの依頼で、不登校で引きこもりがちである中学生のカウンセリングを試みたときも、その子に心を開いて話してもらうことができました。それまで、他人と会ったり、話したりするのを拒んでいた子が、中国人の私に心を開いてくれたときには、とてもうれしく思いました。きっと私が中国人だったので、日本の一般的な見方で子供を評価しないので、安心し

て話してくれたのだと思います。これらの経験から、必ずしも日本人でなくても福祉やカウンセリングなどの仕事はできる、外国人だからこそうまくいく場合もあるという確信を得ました。今後も様々な福祉の現場で研鑽に励みたいと思います。

#### (3) 留学生のためのカウンセリング活動

現代社会では、心の病をもつ人がたくさんいます。留学先でストレスにさらされ、生活や勉強に困る留学生が大勢いても不思議ではありません。自分の経験から見ても、多くの留学生は適切な心のケアや対応を必要としています。特に同じ国出身のカウンセラーは話しやすく、その人のおかれた状況や気持ちを理解しやすいと思います。福祉や心理に関する専門知識を活用して、このような留学生のサポートもしていきたいと考えています。

#### (4) 福祉を通じた国際交流の推進

この仕事は、知識や資格だけではなく、思いやりの気持ちや暖かい心が大切だと思います。ほんの少しではありますが、中国人である自分でも、日本の福祉に参加できたことをうれしく思っています。国の福祉制度が違っていても制度を利用する方たちの気持ちは同じです。援助する側の思いやりにもちがいはありません。まだまだ拙い経験ではありますが、福祉のすばらしさを実感じ、福祉に国境はないと感じました。これからも日本と中国の福祉事業の交流の懸け橋になれるように努力していきたいと思っています。

### 注

- 1 学習者同士の peer feedback もあるが、本稿で教師、学習者間の teacher-student feedback を取り上げる。
- 2 研究の対象となる留学生のことを「指導生」という用語で言及する。
- 3 紙面の制約から、第3稿は資料には載せてないが、これらの改定点は最終稿に反映されている。